



Title	続・ラッパ吹きを描く連環画：角笛の場合
Author(s)	藤井, 得弘
Citation	連環画研究, 9, 15-31
Issue Date	2020-03-10
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98482
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98482
Type	departmental bulletin paper
File Information	renkanga_9_15-31.pdf



続・ラッパ吹きを描く連環画——角笛の場合

藤井 得弘

はじめに

北京の郵政郵票博物館には、古代から現代に至るまで、情報伝達にまつわる様々な道具が展示されている。古代のエリアには、文字を記した甲骨、運搬用の馬車を象った陶器などが展示されており、それらの中に、貴州省の苗族が連絡に用いたとされる〈牛角号（牛の角でできたラッパ）〉が陳列されている（右上図）。

角笛は動物の角から作られる楽器である。素材が身近な物のためか、洋の東西を問わず、古来、様々な合図に用いられてきた。北欧神話において、アースガルドの見張り番ヘイムダル神は、終末の日の際、神々に危機を告げるために、角笛「ギャラルホルン」を吹く¹（右下図）。また、中世フランスの叙事詩「ローランの歌」では、マルシル王との戦いで窮地に陥った主人公ローランが、角笛を吹いて援軍を要請する²。

中国では、角笛は古くは〈角〉と呼ばれ、その呼称は動物の角でできていることに由来する。隋末の類書、虞世南『北堂書鈔』巻121「武功部九」の「角」の項には、「羌胡、呉越より出づ」とある。[明]陳禹謨はそれに注を付し、[東晋]徐野民「車服儀制」から「角はこれ以前の書物には記載が無い。ある者はもともと羌胡で生み出され、（彼らは）これを吹いて中国の馬を怯えさせたと言い、ある者はもともと呉越で生み出されたと言う」との記述を引いている³。羌は西方のチベット系氏族、胡は北方の匈奴である。後半の記述は、南方の呉や越の地方のことを述べていると考えられる。



角笛を吹くヘイムダル神
ローラン・フレリク画（1895）

〈角〉には〈胡角〉の異名もあるが、これは胡人（異民族）が用いていたことに由来するものだろう。また、[宋] 李昉等撰『太平御覧』卷五八四「楽部」の「角」の項では、成書時期は不明だが、「宋楽志」の「起源は不詳であり、いま鹵部（皇帝が出かける際の護衛）および軍中においてこれを用いる」⁴との記述を引いている。つまり、角笛は軍隊でも古くから使用されていたのである⁵。なお、この頃には〈銅角〉と呼ばれる金属製のものもすでに存在していた。

清末に入ると、西洋式の金属のラッパ（ビューグル、右図）⁶が中国にも伝わり、やがて軍隊で用いられるようになる。角笛が近代の軍隊においてどのくらい用いられたのかは判然としない。しかし、近代以降も民兵がしばしば戦闘において合図に用いていたということや、一部の少数民族のあいだでは様々な局面で吹かれていたということは、本稿で取り上げるはなしからも窺われる。



前稿では、角笛と同じくビューグル以外のラッパ吹き事例として、ほら貝を吹く民兵の話を取り上げた。その議論を踏まえつつ、本稿では、連環画において角笛を吹く人物がどのように描かれるのかを眺めてゆきたい。なお、本文では、ビューグルだけでなく、ほら貝や角笛をも「ラッパ」と呼び、それらを吹く兵士を「ラッパ手」または「ラッパ吹き」と表現する。⁷

1. 近代以降の戦争で活躍した角笛——『人民日報』に見えるはなし

新中国成立以降に記された、国共内戦などを描く故事においては、ビューグルやほら貝を吹く兵士のはなしが数多く見られるが、角笛もまた例外ではない。ここでは、連環画を取り上げる前段階として、『人民日報』の記事をふたつ紹介しよう。

まずは、林韋「白雲山十一昼夜——漢江南岸戦闘紀実之五（白雲山の十一日間——漢江南岸での戦闘の記録・その五）」（1951年3月31日第1版）である。朝鮮戦争のさなか、漢江南岸の白山地区で展開された狙撃戦において、ある大隊の副隊長・戴汝吉が角笛を吹く様子が次のように記されている。

城門の近くで、戴汝吉は、いつも身に付けている小さな角笛で勇ましい突撃ラッパを吹いた。敵の自動火器と英雄たちの大地を震わす「突撃だ」「やっつけろ」という声とが一斉に響いた⁸。

このはなしでは、軍隊の兵士がビューグルと同じく突撃の合図に角笛（原文：牛角号）を用いている。「身に付けている」とあることからすると、小型のものらしい。おそらくビューグルに比べて携帯しやすく、軍においても、時と場合に応じて角笛が用いられたということなのだろう。

もうひとつは、時期がくだるが、^{トン}僮族の李春鮮という記者が故郷の角笛吹きを回想して書いた、「牛角号——給一位山村老牛角号手（角笛——山村のベテラン角笛吹きに捧ぐ）」（1962年9月28日第4版）という記事である。この一文は、ラッパ吹きのはなしによく見られるモチーフがいくつか含まれているため、少し詳しく紹介しよう。

まず導入においては、僮族における角笛の様々な用途が示される。ひとつは敵を防ぐというもので、抗日戦争期において、日本軍はそれを聞いて肝を潰したという。また、吉報の伝達のほか、放牧の合図にも用いられることが述べられる。これを話のまくらとして、国共内戦時期の回想が始まる。

まず注目されるのは、ビューグルやほら貝の事例がそうであったように、角笛もまた、楽器本体に関する描写が見られることである。

あなたのその角笛たるや、傷跡が重なり合い、血痕もあちこちにあり、その上には敵の血が飛び散ったこともあれば、あなた自身の血の染みもあるだろう。⁹

ラッパが「血に染まる」というモチーフは、例えば『紅色小号手』（少年児童出版社、1963）などラッパ吹きの物語にはしばしば見られるものであり、角笛を吹くはなしもまた同じプロットによって構成され得ることが窺える。続いて、国民党に村を包囲された場面である。

そのとき、砦の端のその高い坂の上で、あなたの角笛は激しく鳴り響いた。（中略）銃と弩は夜明けの中で^{とき}聞の声をあげ、槍と刀は朝日に光り輝き、反動派は駆逐された。しかしあなたはというと、すでに坂の上で昏倒していたのだった。角笛はまだ手に握りしめられ、吹き口も唇から離れてはいなかった……¹⁰

この角笛吹きは昏倒していただけであり、犠牲となったわけではないのだが、倒れてなおラッパを口から離さなかったとするくだりは、日清戦争で活躍したとされる我が国のラッパ手、木口小平の話を彷彿とさせる。木口の話が下敷きになっているかどうかは定かではないが、ラッパ手の勇ましさの表現として十分あり得るものだろう。

話の最後は、春耕（春季の農作業）の初日の朝に角笛が吹かれる場面で締め括られる。

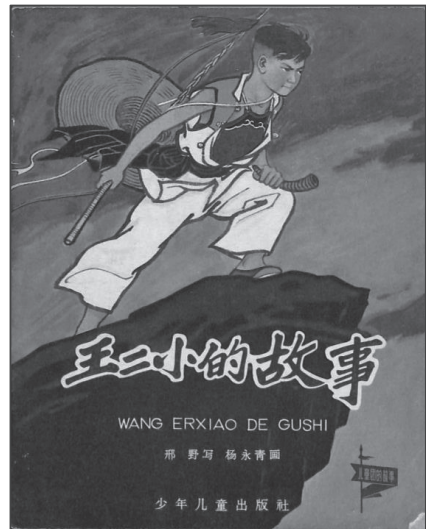
春耕の最初の日の明け方、激高した角笛が高らかに鳴り響いている。あなたが吹いているのは農業を大いに起こさんとする進軍ラッパです。あなたの吹いた音は悠々として勇壮かつ豪放であり、信じるに十分足る、われわれ僮族の気質と同じです。／親愛なるラッパ手よ、お吹きなさい、あなたの音で人びとに告げるのです。僮族の民は祖国6億の人民とともに歩まんとしているのだということを。¹¹

ここに見えるのは、比喩的な意味での「進軍ラッパ」(原文:進軍号)である。これはラッパの比喩としては珍しいものではなく、時期的に前後する『人民日報』の記事を少し眺めるだけでも、「永遠吹響革命的進軍号(革命の進軍ラッパを永遠に吹き鳴らそう)」(1968年5月5日第4版)、「[通知]吹響中国文化大革命進軍号(文化大革命の進軍ラッパを吹き鳴らそう)」(1968年5月18日第5版)といった事例をいくつも確認することができる。このような、革命を前に進めようとするスローガンと「ラッパ」の比喩との結びつきは、ラッパ吹きを描くはなしが戦争故事のなかで少なからず取り上げられることの、遠い背景となってもいるだろう。

2. 住み分けられるラッパ吹き——彩色絵本『王二小的故事』(1965)

ここからは連環画や彩色絵本を取り上げよう。まずは、邢野写・楊永青画『王二小的故事』(少年兒童出版社、1965.4、28開)である。その筋立ては次のようなものである。

抗日戦争期、晋察冀根拠地での話。13歳の牧童・王二小は東の山で歩哨の任にあたっていたところ、遠くに日本軍の銃声が響くのを耳にする。そこへ八路軍の団長が通りかかり、峡谷へと敵をおびき寄せたい旨を王に伝え、その場を去った。王は思案するも無策のまま敵が襲来、角笛を吹いて八路軍と村人に知らせる。逃げる間もなく日本軍と遭遇した王だったが、機転を利かせて件の場所へと敵を誘導する。するとそこへ地主の息子が八路軍の居場所を密告しに来た。王は、「こいつは変装した八路軍だ」と言い、敵の注意を地主の息子へと逸らして逃げおおせる。その後、王は敵の元へと引き返し、相手を引き付けて八路軍の突撃を援護する。敵は殲滅されるが、王は戦いのさなか命を落とす。



この話では、王二小が敵襲を知らせる際に角笛が用いられ、その場面は以下のように描写される。

二小は敵がすでに前の山まで来ているのを知ると、慌てて通信用の樹木を運び、山妮（児童団の女子）に知らせ、そして角笛を持ってパパーッと吹き鳴らした。角笛の音は山野を震わし、八路軍と村人たちは敵が来たことを知った。¹²（右図）

「通信用の樹木」（原文：信号樹）というのは、村人が八路軍と秘密裏に連絡を取るための手段である。敵が来たときに樹木を倒しておき、その向きによって敵の来る方向を示すというもので、右上図で王二小が足で押さえている樹木がそうである。

ここで王二小は味方への合図として角笛を吹き鳴らしており、それ自体はラッパ吹きのはなしとしておなじみの展開だと言えよう。しかし気になるのは、彼とは別に八路軍のラッパ手の姿が描かれていることである（右下図）。

少なくとも文章においては、このラッパ手がビューグルを吹くことは示されない。最後に八路軍が突撃する場面でも、ラッパを吹いている様子が遠景に描かれてはいるものの、文章では銃声や手榴弾の音が描写されるばかりである。

つまり、この絵におけるふたりのラッパ吹きの立ち位置が示すように、八路軍のラッパ手は存在こそすれ物語の「後景」へと追いやられており、相対的に、ラッパ吹きとしての王二小の活躍が前景化されているのである。

極め付きは、王が八路軍の兵士とともに突撃し、犠牲となる場面である。

勇敢な王二小は、鮮血で紅く染まった角笛を掲げて高らかに叫んだ。「共産党万歳！ 毛主席万歳！」¹³



ラッパが鮮血で染まるというモチーフが、ラッパ吹きのはなしを構成する主要な要素のひとつであることはすでに述べた。王二小は犠牲となることで英雄として描かれており、もうひとりのラッパ手の存在は完全に陰に隠れている。このような、角笛とビューグルの奏者の「住み分け」の問題については、後にまた触れることとする。

3. 批判大会を呼びかける角笛——連環画『号角』(1975)

続いて、鄧泰和編絵『^{ラッパ}号角』(河北人民出版社、1975.12、64開、右上図)である。この連環画は『王二小的故事』から10年ほど隔たるのだが、管見の限りでは、角笛吹きのはなしは1970年代半ばに集中している。これは、1973年に制作されたアニメ『小号手(小さなラッパ手)』の影響もあるかもしれないが、可能性を指摘するに止めておく。



この冊子は、「号角」「爺爺和小桃」の2篇から構成されており、ここでは「号角」のみを取り上げる。連環画「号角」は、同名の短編小説集(右下図)に収録の一篇、馬加鞭「号角」(紅小兵叢書13『号角』、江西人民出版社、1972所収)を基に改編したものである。まずは小説版の筋立てを述べ、続いて連環画における改編のあらましを紹介したい。



北莊の生産隊長・田正海の息子・田大亮といとこの王小明(連環画では徐小星)が黒牛の世話をしていたところ、手綱を解かれた南莊生産隊の白牛が黒牛めがけて襲いかかってきた。牛同士の争いの結果、黒牛は角を一本失う。手綱のことを怪しんだ大亮は、近ごろ黒牛をじろじろ見ていた三歪嘴の仕業かと疑う。南莊へと白牛を返しに行った田正海は、三歪嘴の仕業であったことを調べ上げる。そして戻ってくると、息子の大亮に対して、黒牛の取れた角で笛を作り、合図に用いて三歪嘴の批判大会を開くよう促す。翌日、大亮が夕焼けのなか角笛を吹き鳴らすと、ふたつの集落の生産隊員は意気軒昂と批判大会にやって来るのだった。

連環画版では、上記のプロットに若干の改編が加えられている。大きな点としては、「批判大会」が「批林批孔大会」に改められていることが挙げられる。三歪嘴が白牛の手綱を解いた理由についても、南北の村の生産隊の関係を悪化させ、批林批孔運動の展開を妨げるためであったことが、より具体的に示されるようになった。

批林批孔運動は、1973年8月から文革末期にかけて展開した政治運動であり、1974年の初頭から激しくなっていた。林彪と孔子への批判が大々的に行なわれたが、実質的にはそれに仮託して行なわれた周恩来批判であった。このような時代背景が、作品にも影響しているのである。

そのほかの改編として興味深いのは、大亮と小星が、互いの持ち物からそれぞれ革命に関する重要な気づきを得たのち、それを贈り合うことで革命への意志を確認し合うくだりが見られることである。まずは小星が、袋に入れて持ち歩いている雨花石を大亮に見せる場面を見てみよう。大亮が袋のなかから紅い石を取り出す際のふたりのやり取りは、次のように記されている。

大亮は紅い石を取り出して尋ねた。「小星、この色がなぜ紅いかわかるか？」小星はためらわずに答えた。「革命烈士の鮮血が紅く染めたからさ！」¹⁴（20コマ目）

大亮はこれに続けて、雨花台（南京市内）にある石はどれも革命烈士の鮮血に染まっている、自分は雨花台には行ったことはないが、政治権力を敵から守ることの重要性をこの雨花石が教えてくれたと語る。他方、小星もまた、大亮から白牛の一件が三歪嘴の陰謀によるものだと言われ、一本の牛の角から階級闘争の重要さを学んだと述べる。雨花石と牛の角は、いずれも革命精神を象徴する「紅い」小道具なのである。そして大亮は、小星に角笛を手渡し、階級闘争を呼びかけ、小星はその返事として雨花石を大亮に贈る。大亮が小星に角笛をあげる場面を見てみよう。

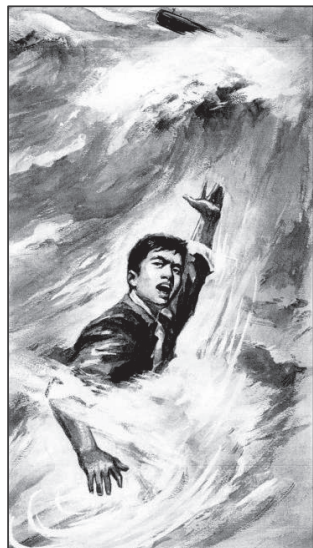
大亮は角笛を小星にあげた。小星は感激のあまり何を言えばよいかわからず、服でその特別な角笛を何度も磨いた。大亮は嬉しそうに言った。「小星、ぼくらは階級敵に対する進攻のラッパを永遠に吹き鳴らすんだ！」¹⁵

（27コマ目、右図）



左側、帽子をかぶっているのが大亮である（前頁図）。大亮は背丈が小星よりも高く描かれることで、兄貴分であることが示されている。

さらにその後ろの壁には、知識青年・金訓華のポスターが控えている。金は1965年5月に下放政策によって上海から黒竜江省へとやってきた。しかし同年8月に、国家の資産たる電柱が洪水で流されたのを拾い上げようとして落命し、後に模範として称揚される。ポスターのもととなった水彩画は、画家の徐純中によるもので、同年の『紅旗』第12期誌上に発表された（右上図）¹⁶。先の画面に描き込まれたこの絵は、階級敵との闘いを決意するふたりの精神と共鳴するものだと言えよう。



最後に、角笛が吹かれる場面を見ておこう。話の末尾で、大亮は父の言葉に従い、角笛を吹いて批判大会を呼びかける（30コマ目、右中図）。これについて、大亮は角笛を小星にあげたのではなかったか、と気になる向きもあるかもしれない。しかし、先の物品の贈答については、革命への意志を互いに共有するための儀式であったと考えられないだろうか。そのように考えると、所有者についてはさほど問題ではなくなるだろう。



ちなみに、批林批孔大会を呼びかけるためにラッパを吹くというくだりは、連環画『海螺』^{ほらがい}（山東人民出版社、1973.5）にも見える（84コマ目、右下図）。こちらは角笛ではなくほら貝だが、帽子をかぶった年上の少年が、小高いところに立って



ラッパを吹く点や、その周りに紅纓槍を手にした仲間が立っている点など、『号角』との類似点が認められる。風呂上がりに牛乳を一杯、といった風情で腰に片手を当ててラッパを吹くポーズもまた、ラッパ吹きのはなしにはお馴染みのものであり、この後も類似のポーズをたびたび目にするだろう。

4. 引き継がれる紅い布と角笛——連環画『号角声声』(1978)

苗東原著、蘇長仙改編、冼小前絵画『号角声声(ラッパの音は高らかに)』(広西人民出版社、1978.6、64開)は次のような話である。

1951年春、広西省の大苗山区でのこと。
14歳の苗族^{ミャオ}の児童団員・阿鋒は、獵犬の「崖上飛」^{ヤーシャンフエイ}を相棒として引き連れ、牛の放牧をしながら歩哨の任務にあたっていた。すると、「光頭狼」^{ハゲ}の異名を持つ孟継復^{ヤオ}ら国民党の残党が、瑶族^{ヤオ}に扮して山中に潜伏しているのを目撃する。光頭狼は、阿鋒の祖父の代からの因縁の敵であった。祖父はかつて光頭狼の左耳を切り落としたが、あと一步のところまで殺されていたのである。阿鋒は仲間の民兵に敵の存在を知らせるべく、山を背にして風上に立ち、伝家の角笛を吹いた。光頭狼はその場から逃げ、みずからは樹木の陰に隠れ、一味のふたりに阿鋒の動向を追わせるが見つからない。すると阿鋒は密林の奥でまたも角笛を吹き、犬とともにふたりの敵を襲撃、ひとりを紅纓槍で仕留める。犬が咬んだほうは逃げたが、阿鋒は倒した敵の銃を奪って発砲することで、大人の民兵がいると錯覚させ、敵を攪乱する。民兵隊長の阿爸^{アーバー}が民兵を率いて救援に駆けつけると、阿鋒は角笛を吹いて突撃の合図を出し、総攻撃を仕掛ける。阿鋒は逃げた光頭狼を追い詰めると、銃で相手の腿を打ち、ついに捕えたのであった。



主人公の阿鋒が光頭狼との戦いで再三にわたって吹くこの角笛は、国民党軍との戦いのさなか命を落とした祖父が使っていたもので、祖父から父へ、そして阿鋒へと受け継がれたものであることが作中では示されている。ここから、ラッパに託された革命精神の継承というモチーフが窺われる。これは、同時期のラッパ吹きのはなし、例えば連環画『軍号長鳴(軍隊ラッパは鳴り続く)』(浙江人民出版社、1974.4)などにも見える。関連して、阿鋒のラッパには紅いシルクの布が結ばれているが、これもまた、角笛の吹き方を阿鋒に教えた解放軍のラッパ手・崔軍から譲り受けたものであった。ラッパ吹きのはなしにおいて、この布がしばしば革命精神を象徴する道具として描写されることは、前掲の拙稿でも述べており、ここでは繰り返さない。¹⁷

特筆しておきたいのは、崔軍と阿鋒が、ビューグルを吹く解放軍の大人と角笛を吹く民兵の子どもという対比を成しており、前者が後者を教化する構図になっていることである。これは前稿で取り上げた、ほら貝を吹く兵士のはなしとも共通する¹⁸。角笛を吹く兵士の場合は、さらに少数民族という要素が付加される場合があるらしい。

これは、近代以降も少数民族のあいだで角笛が用いられていたことが理由としては大きいだろうが、さらにその背後には、おそらく古来の角笛イメージが横たわっている。

あらためて、阿鋒が角笛を吹く場面を取り上げておこう。阿鋒は山中で瑶族に扮した怪しい集団を見かけた際、そのひとりに左耳が無いのを見てとり、仇敵の光頭狼であることを悟る。そこで、角笛を吹いて大人の民兵に敵の存在を知らせる。

阿鋒は後方の坂道を越え、山を背にして追い風に向かい、東南の方角に向けて、「敵に動きあり」という意味のラッパの音を「パーパー」と発した。この匪賊らは窪地におり、それでもまったく気づくことはなかった。¹⁹ (27コマ目、右図)



このコマでは、角笛に結び付けられた布によって風向きが表されており、阿鋒が追い風に音を乗せようとしていることが分かる。これは説明文に忠実な描き方だと言える。一方、本節の冒頭に掲げた表紙絵（前頁）では、同じく布の向きによって、阿鋒が逆風に立ち向かっているかのように描かれている。布のたなびく向きには、絵師がどのように場面をイメージしているのかが反映されている。

そのほか、角笛に息を吹き込む阿鋒の頬がやや膨らんでおり、描き方がリアルな点として挙げられる。また、阿鋒の足元にいる猟犬「崖上飛」は、少し首をかしげた様子をしており、角笛の音に耳を傾けているかのように微笑ましい。

5. 黎明を告げる不思議な角笛——連環画『鶏鳴山下』（1978）

次に取り上げるのは、戴曉權改編・朱黎黎絵画・胡博綜封面画『鶏鳴山下（鶏鳴山のふもとにて）』（江蘇人民出版社、1978.6、64開）である。この連環画は、胡正言・閻世宏による同名の中編小説（人民文学出版社、1976.8）をもとに改編されたものである。その筋立ては次のとおりである。



1949年春、長江沿いにある鷄鳴山麓の臨江村ではなし。何小江、長生、玉珍の3人は遊撃隊の梁隊長から言伝を頼まれ、地下通信員である小江の母（単栄英）に、江北の解放軍からの偵察員を迎えるよう伝える。情報は悪徳地主で保安隊長の馬本財にも知られてしまい、小江の母は偵察員・鄭栄を迎え入れるも、保安隊に村を包囲される。小江は鄭とともに逃げるが、鄭は敵の銃弾により負傷し、母親も捕まる。小江は昏倒した鄭を背負って逃げていると、そこへ長生と玉珍が駆けつけ、一行は山中の水簾洞に身を隠す。介抱のおかげもあって鄭栄は目を醒ますと、遊撃隊に手紙を渡す任務を子どもらに託す。小江たちは一計を案じて任務地への通行証を手に入れ、通信員の暗号から遊撃隊が鳳凰山にいることを突き止める。小江は山中で敵と遭遇し、銃弾を肩に受けつつも応戦、そこへ梁隊長らが駆けつけ、敵を始末する。小江は鄭から預かった手紙を梁隊長に渡す。その夜、解放軍の渡江に合わせて、梁隊長らは馬本財の屋敷に攻め入り勝利する。小江は梁隊長とともに鷄鳴山の山頂へゆき、隊長から渡された角笛を吹き鳴らす。解放軍は長江を渡り、遊撃隊との合流を果たす。

まずは作品の背景を説明しよう。このはなしはいわゆる「渡江戦役」を描いたものである。渡江戦役とは、第二次国共内戦期に中国共産党の勝利を決定づけたとされる「三大戦役」（「遼瀋」「淮海」「平津」）の3つの戦役、期間は1948年9月から1949年1月）の後、長江以北の大都市を得た共産党軍が最終的に長江を渡り、国民政府の首都・南京への入城を果たした戦いのことである。²⁰

渡江戦役といえば、先行する著名な作品に映画『渡江偵察記』（1954、白黒）がある。渡江作戦の前夜、解放軍の某部隊が、長江南岸の敵軍の兵力や守備の状況を探るべく、連隊長ら偵察兵を北岸から派遣し、南岸の遊撃隊の協力のもとタイミングを図り、渡江を成功へと導くというはなしである。映画の後、1950年代だけでも複数の連環画が生み出されており、代表的なものに章程改編、顧炳鑫絵画『渡江偵察記』（上海人民美術出版社、1955.3、下図）がある。1974年には映画のカラー版が撮り直され、翌年には顧炳鑫の連環画も再版された。

『鷄鳴山下』は、渡江戦役について、渡る側とそれを迎える側の連携を主軸に描いている点で、「もうひとつの『渡江偵察記』」といった趣向の作品だと言える。それが1970年代の後半になって小説や連環画として発表された背景には、同時期における『渡江偵察記』の再評価があったと思われる。



ちなみに、映画『渡江偵察記』（1974）の影響は、川を渡るというプロットを持った作品が続けて発表されていることから窺われる。連環画の事例としては、解放戦争における黄河北岸の民兵隊・葫蘆隊の活躍を取り上げた『紅泉渡』（河南人民出版社、1978.8）や、1935 年における紅軍の長征を部分的に描いた『巧渡金沙江』（江蘇人民出版社、1978.9）などが挙げられる。

話題を連環画『鶏鳴山下』へと戻そう。このはなしでは、角笛を吹くくだりは、解放軍が長江をまさに渡らんとする、クライマックスの部分に見える。

小江は梁隊長について鶏鳴山の山頂へと駆け上がった。梁隊長は厳肅な態度で角笛を小江に手渡した。「吹くんだ、解放軍が渡江を始めたぞ！」「パパパー……。」輝かしいラッパの音は、暗闇を突き破り、夜明けを迎えた。」²¹

（117 コマ目、右図）



ここで気になるのは、梁隊長が角笛を小江に渡した背景であり、小江が角笛を吹いている理由である。この前後のコマにおいても、小江が角笛を吹く具体的な理由は示されていない。そこで、この場面について小説版を確認すると、まず角笛を渡す兵士は、隊長ではなく大個子という別の人物となっている。この設定の変更は、どうやら登場人物を削ったことによるもののようである。また、小説版には角笛を吹く前後の流れが、より詳しく記されている。

解放軍が渡江を始めた！ 大個子はベルトから角笛を抜き出すと、小江に向かって言った。「行こう、はやく第二中隊と第三中隊、そして三叉路にいるみんなに合図を送るんだ！」小江は大個子について走りに走り、体じゅう力をみなぎらせた。彼らは祠堂を出て、谷川を走りぬけ、鶏鳴山へと登った。小江が言った。「大個子おじさん、僕に吹かせてよ！」大個子は厳肅な態度で角笛を小江に手渡した。小江は足を開いて、片方の手を腰にあて、足を踏ん張り力を込めて吹いた。「パパパー」「パパパー」ラッパの音はこんなにも輝かしい！ 小江はあの古い伝説をふと思い起こした。これは金鶏が高らかに歌っているんじゃないか！²²（274 頁）

引用から窺われるように、小説版には、小江が角笛を吹いた理由として、解放軍の渡江が始まったことを味方の隊に知らせるためだったことが記されている。それに対して連環画版では、小江が角笛を吹く具体的な経緯が示されておらず、結果として、誰かに合図を送るというよりも、渡江の成功をただ祝福しているかのように見える。

このような書き方になったのは、引用最後に言及されている金鶏の伝説とも関わりがあるかもしれない。原作の小説では、「鶏鳴山」という呼称がこの伝説に由来するものであることが示されている。むかしこの一帯は美しい沃野だったが、突如ムカデが出現し、その日を境に辺りは暗闇に包まれ、草花や動物も死に絶えた。ムカデを倒すべく金鶏が到来し、激闘の末に一度はムカデを制圧するも、喉をハサミで潰されてしまう。人びとは一番高い山を鶏鳴山と名付け、金鶏のきれいな歌声が戻るよう願ったが叶わなかった、というはなしである。小説の冒頭、この伝説を話題にした小江、長生、玉珍の3人は、ムカデを悪徳地主に擬え、共産党の革命によってこれを除くことこそが金鶏を復活させる方法だと結論づけている。

この伝説を踏まえつつ、あらためて連環画の文章に目を向けると、「暗闇を突き破り、夜明けを迎えた」と記されているのが注目される。これは金鶏の伝説に見える暗闇の世界が光を取り戻したことを表現しているのではないだろうか。連環画版が不思議な印象をもたらすのは、小説中の金鶏の伝説を下敷きにしていると思われるものの、この伝説にはまったく言及していないためだと考えられる。

この連環画でもうひとつ注目されるのは、角笛吹きとは別のラッパ手の扱われ方である。小説版では、解放軍が渡江した後も話が続き、遊撃隊が敵陣に攻め入る場面も描かれる。そこには、ラッパ手が突撃の合図を吹く描写もなされている（第20節「激戦」）。しかし、連環画版にはその描写はなく、前頁にも引いたように、117 コマ目で角笛を吹いた後、次のコマで戦いに勝利したことが示され、話はそのまま終わる。かろうじて、110 コマ目の画面左手にビューグルを持ったラッパ手の存在が確認できるばかりであり（右図）、やはりこの人物に関する説明はとくにない。おそらく、連環画へと話を圧縮した際、主人公の小江が角笛を吹く場面をクライマックスに持ってきたことから、役割の類似するもうひとりのラッパ手を描くことは避けたものと考えられる。ここにもまた、本稿の第2節で取り上げた『王二小的故事』のように、角笛の吹き手とビューグルの吹き手の住み分けが確認される。



6. ビューグルが吹きたくて——連環画『抗聯小号手』(1984)

最後に、梁之編文・趙丁絵画『抗聯小号手（抗日聯軍の小さなラッパ手）』（吉林人民出版社、1984.7、64開）を紹介しよう。

タイトルに見える「抗聯」とは、満洲において共産党の指導のもとに活動したパルチザン部隊「東北人民革命軍」から派生して組織された、「東北抗日聯軍」の略称である。このはなしは、抗聯と日本軍との戦いを描いている。



この連環画では、ここまで取り上げてきたはなしとは異なり、主人公の少年が角笛ではなくチャルメラを吹いている。チャルメラは一般には^{スオナー}〈噴呐〉と呼称され、婚礼や葬礼で演奏される伝統的な民族楽器である。リードを振動させて音を鳴らす楽器であり、角笛やビューグルといった唇を振動させるタイプの楽器ではない。このように、使い方も吹き方もビューグルや角笛とは異なるのだが、先に向かって太くなるという形状から、〈喇叭〉とも呼ばれる。つまり主人公は、角笛ではないものの、ビューグル以外の「ラッパ」を吹いているのである。さらに、主人公は最終的にビューグルへと楽器を持ち替えており、角笛とビューグルの関係について考える手掛かりにもなるだろう。はなしの筋立ては次のようなものである。

1936年春、長白山のふもとの県城に、苗小虎というチャルメラ吹きの少年がいた。その父親もまた地元では名の知れたチャルメラ吹きであったが、遯ること四年前、日本軍の通訳・邵小鬼の正妻との婚礼にあたり、演奏の時間に遅れてしまい、邵によって殺されていた。はなしはその邵が側室を迎える日のこと。小虎は婚礼で演奏することになり、会場で待機していたが、居眠りをしたせいで、寝ぼけて葬礼用の調子で吹いてしまう。邵の怒りを買い、危害を加えられそうになった小虎は、邵の邸宅から逃げ出し、対抗勢力の抗聯を尋ねて山中へと向かう。途中、追っ手から逃れて行き倒れになるが、運よく抗聯の連隊長に介抱され、小虎は入隊を志願した。晴れて隊に加わった小虎は、部隊の少年ラッパ手・小馬からビューグルの手ほどきを受けるが、小馬は日本軍との衝突した際、突撃ラッパを吹こうとして敵の銃弾に斃れる。小虎は未熟ながらも小馬のビューグルで進軍の合図を出して局面を打開し、後に小馬の遺志とともにビューグルを正式に受け継ぐ。練習を重ねた小虎は、戦いのさなかビューグルを吹くのみならず、剣で邵小鬼を刺し殺す活躍をもみせるのだった。

筋立てでは示さなかったが、主人公の小虎は、母親から抗聯のラッパ手が活躍した話（右上図、6コマ目）を聞き、ラッパ手になればどんなにいいか、とこぼしている。小虎が抗聯への入隊を志願したのは、このような背景があった。かくして小虎はビューグルへと楽器を持ち替えることになるのだが、正式に組織のラッパ手として任命されるのは、犠牲となった小馬のラッパを受け継いだ後のことである。このように、往々にしてラッパに革命への意志が託されることはすでに述べた。



ラッパ手への強い憧れを持っていた小虎は、練習熱心である。ラッパを継承した次の場面（78コマ目、右中図）では、「苗小虎はすべての楽譜を練習して吹けるようになっただけでなく、坐っていても横になっていても吹けるようになった」²³と記されている。



もっとも、ラッパ手として一人前になった小虎が邵小鬼との戦いで吹いたラッパは、突撃の合図ではなく、かつて婚礼の時にチャルメラで聴かせた葬礼用



の旋律であった。これまで取り上げてきたラッパ吹きのはなしには、ほら貝や角笛に特有の旋律が吹かれるといった描写は見当たらず、これはチャルメラならではの展開だと言える。なお、突撃ラッパの類いではないためか、絵のほうには、小虎の姿ではなく、音を聞いて怯える邵小鬼と日本兵が描かれている（86コマ目、右下図）。

ここであらためて、ビューグルとそれ以外のラッパとの関係について考えてみたい。チャルメラ吹きがビューグルに憧れて楽器を持ち替えるというプロットは、羅丹「小号手」（羅丹著『飛狐口』、新文芸出版社、1950所収）という短編にも見える。

「司号員（ラッパ手）」にあこがれる16歳の少年黒棗は、いつもビューグルの真似事で〈^{チャルメラ}噴子〉を吹き、「司噴員」などとからかわれていた。また、共産党員になれる

17歳には年齢が届かず、忸怩たる思いで過ごしていた。ある日、敵陣を前に味方のラッパ手が負傷してしまい、黒棗はとっさの判断から、そのビューグルを手にとって代わりに突撃の合図を吹く。しかし、黒棗もまた敵の銃弾を受けてしまう。彼は部隊長に、ラッパ手になりたい、共産党に入りたい、と願いを伝えて事切れる。

『抗聯小号手』の小虎は、小馬からビューグルの吹き方を教わっており、自分でも練習を重ねていた。一方、「小号手」の黒棗は、練習もなしにビューグルを吹いている。先に述べたように、チャルメラとビューグルでは音の出し方が異なっており、この展開には現実味が無い。しかし、むしろそれによって、「楽器の持ち替え」というプロットが重要視されていることが分かる。

なお、この「持ち替え」というプロットについては、チャルメラに限らず、角笛を吹く兵士のはなしにも類例がある。短編小説「第一支軍号（初めてのビューグル）」（中国民間文芸研究会編『第一支軍号』、人民文学出版社、1965.9所収）である。ある小隊のラッパ手の少年は、角笛の音が不満で、ビューグルを吹きたがっていた。すると指導員から「自分次第さ、ラッパはどこにでもあるじゃないか」と助言される。少年は戦場で敵兵からビューグルを奪うと、隊のなかで初めてビューグルを吹き鳴らし、戦いを勝利へと導く。ビューグルによって、隊の士気は否応にも高まるのであった。

以上の事例からは、ビューグルへの「持ち替え」が、往々にして戦場での貢献または軍や党への正式な参加と結びついており、ラッパ吹き「成長」を示すプロットだということが分かる。その「成長」は、ビューグルとそれ以外のラッパに「格差」があるからこそ成り立つものであろう。そして本稿で取り上げた、それぞれの吹き手の作中における「住み分け」もまた、この「格差」によって支えられているのである。

おわりに

本稿では、角笛を吹く兵士が登場する戦争故事を中心に取り上げた。前稿のほら貝のはなしで確認された、金属のラッパを吹くのは軍人、ほら貝のラッパを吹くのは民兵という特徴は、角笛の場合も同様であることがあらためて確認された。角笛のほら貝との違いとしては、材料が動物の角であることも大きく関わるだろうが、それを吹く少年の多くが牧童であり、少数民族である場合も少なくないことが挙げられる。

いずれにしても、ビューグルとその他のラッパ、とくに角笛とのあいだに見られる「格差」は、軍人と民兵、指導員（大人）と少年、漢族と少数民族といった、様々な対立項を巻き込むかたちで、ラッパ吹きのはなしの骨格を作り上げているのである。

注

- ¹ 北欧神話については、ヴィルヘルム・グレンベック『北欧神話と伝説』（山室静訳、講談社学術文庫 1963、2009）、アクセル・オルリック『北欧神話の世界 神々の死と復活』（尾崎和彦訳、青土社、2003）等を参照。ヘイムダル神の図版は、村松一男・平藤喜久子編著『神のかたち図鑑』（白水社、2016）第9章「道具」より転載（330頁）。
- ² 『ローランの歌 狐物語』（「中世文学集」II、佐藤輝夫訳、ちくま文庫、1986）を参照。
- ³ [隋] 虞世南撰、孔広陶校注『北堂書鈔』（文海出版社、1962）。『北堂書鈔』の原文は「出羌胡吳越」。注釈の原文は「角，前世書記所不載。或云本出羌胡，吹以驚中國之馬，或云出吳越也」。
- ⁴ 『太平御覧』（中華書局、1960）。原文「未詳所起，今鹵部及軍中用之」。
- ⁵ 李純一は『中国上古出土楽器総論』（文物出版社、1996）において、戦国時代の出土物に見える角について紹介しており、少なくともこの頃には用いられていたことが窺われる。
- ⁶ ビューグルの写真は、マックス・ウェイド＝マシューズ『世界の楽器百科図鑑：楽器の起源と発展』（別宮貞徳訳、東洋書林、2002）より転載（176頁）。
- ⁷ 本稿は、拙稿「勇敢なるラッパ手を讃えて——連環画に見えるその形象」（『連環画研究』第2号、2013）の議論を参照しており、拙稿「ラッパ吹きを描く連環画——ほら貝の場合」（『連環画研究』第6号、2017）の続編にあたる。
- ⁸ 原文「在城門附近，戴汝吉隨身常帶的一支小小的牛角號吹起雄壯的沖鋒號。敵人的自動火器和英雄們震撼大地的“沖”“殺”聲一齊吼叫起來。」
- ⁹ 原文「你吹的這支牛角號啊，只見它傷痕累累，血跡斑斑，那上面濺上過敵人的血，也染有你自己的血點。」
- ¹⁰ 原文「這時候，在寨頭的這片高坡上，你的牛角號激昂地高叫起來了。（中略）火銃和強弩在黎明里吶喊，梭鏢和大刀在晨曦中閃耀，反動派被趕走了。可是你啊，却已經昏倒在高坡上，牛角號還緊緊握在你的手里，號嘴也沒有離開你的嘴唇……。」
- ¹¹ 原文「是春耕的第一個清晨，激昂的牛角號在高叫。（中略）你吹的是大辦農業的進軍號啊，你吹出的號聲悠揚、雄壯、豪放，信心十足，象我們僮族人的性格一樣。／親愛的號手啊，吹吧，用你的號聲告訴人們：僮族人正和祖國六億人民一起前進。」
- ¹² 原文「二小知道敵人已經到了前山，他急忙搬到信號樹，讓山妮知道，又拿起牛角嗚嗚地吹起來。牛角聲震動了山野，八路軍和老鄉們知道敵人來了。」
- ¹³ 原文「英勇的王二小，舉起被鮮血染紅了的牛角，高聲呼喊：共產黨萬歲！毛主席萬歲！」
- ¹⁴ 原文「大亮揀了一顆挺紅的石子問：「小星，你說這顏色怎麼是紅的？」小星不猶豫地答道：「是革命烈士的鮮血染紅的！」
- ¹⁵ 原文「大亮把牛角送給了小星。小星激動得不知說什麼了，他用衣服把這只不平常的牛角擦了又擦。大亮高興地說：“小星，我們要永遠吹響向階級敵人進攻的牛角呵！”」
- ¹⁶ この絵に関しては、王明賢、嚴善錚『新中国美術図史（1966-1976）』上冊（中国青年出版社、2000）を参照。
- ¹⁷ [前掲] 拙稿「勇敢なるラッパ手を讃えて——連環画に見えるその形象」。
- ¹⁸ [前掲] 拙稿「ラッパ吹き描く連環画——ほら貝の場合」。
- ¹⁹ 原文「阿鋒翻過背面坡，背山順着風，“嘟嘟嘟”地向東南方向發出“發現敵情”的號聲。這伙土匪在腳盆坳里，還一點也沒有察覺呢。」
- ²⁰ 渡江戰役については、李新総主編『中華民国史 第12卷』（中華書局、2011）を参照。
- ²¹ 原文「小江隨着梁隊長跑上鷄鳴山頂。梁隊長鄭重地把牛角好交給小江：“吹吧，解放軍開始渡江啦！”“嗚嗚——”響亮的號聲，冲破黑暗，迎來了黎明。」
- ²² 原文「解放軍開始過江了！大个子从腰带上拔出牛角号，对小江说：“走，赶快去给二中队、三中队和三岔口的群众发信号！”小江跟着大个子，跑啊，跑啊，他浑身都是劲！他们跑出了祠堂，跑过了山沟，登上了鸡鸣山。小江说：“大个子叔叔，让我来吹吧！”大个子郑重地将牛角号交给了小江。小江分开两腿，一手叉着腰，鼓足劲吹了起来：“嗚嗚……”“嗚嗚嗚……”号声是那样响亮！小江忽然想起了那个古老的传说，这不是金鸡在高唱吗！」
- ²³ 原文「苗小虎不但练会了所有的号谱，还能坐着吹，躺着吹」。